鷗友学園女子中学校

二〇二二年度

第一回入学試験問題

【国語】

時間 45分

【校長からのメッセージ】

おはようございます。まず、左の【注意】をていねいに読んでください。
今日までよくがんばってきました。
鷗友生は困難な事があってもあきらめずに、何とかしようと努力します。
今日の問題に対して、皆さんも最後まであきらめずに解答しましょう。
試験の開始までもう少し。
深呼吸して気持ちを落ち着かせて待ってください。

【注意】

1 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
2 問題用紙は、全部で14ページあります。試験中によごれや不足しているページに気づいた場合は、手をあげて監督（かんとく）の先生をよんでください。
3 解答用紙は問題用紙にはさまれています。
4 問いに字数指定がある場合には、最初のマス目から書き始めてください。なお、句読点なども一字分に数えます。

受験番号	氏名

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

別府市立浜岡中学校に通う合志俊介・天沢一平・庭井湯太郎の三人は同じ町内で育った幼なじみである。俊介の父（葉造）と一平の父（永伍）は、地図製作会社キョーリンを共に立ち上げた。葉造は地形を調べる調査員のリーダーとして、永伍は社長として働いている。次の場面は病死した湯太郎の母親の葬儀が終わって数日経ったところである。

湯太郎の忌引きはなかなか明けなかった。あと数日で三学期も終わるという土曜の午後、俊介と一平は湯太郎の長屋を訪ねた。窓も戸も閉じられており、人が暮らしている気配はなかった。

一平が首を傾げた。

「どこへ行きよったんやろ、あいつ」

「教会へ行ってみらん？　今日は英語の授業があったはずで」

「おー、行ってみよう。英語狂やけん、教会には出ちょんかもの」

十五分ほど坂道を登り、見晴らしのいい教会についた。むかし別府へ静養に来たイギリス人技師が景色に惚れこんで設計したもので、簡素なつくりが好ましい。いまの神父も「デーケンさん」と市民に親しまれている。

一平が窓から中を覗き込み、

「おっ、いたいた」

と川で岩魚でも見つけたように言った。「終わるまで待つか」

二人は庭園の花壇のレンガに腰をおろした。色とりどりのチューリップが咲きみだれ、芝生の青い匂いが鼻をつく。

①「じつは昨晩、葉造さんとうちの親父が激しく口論してな。原因はお前っちゃ」

「俺の……就職？」

「ああ。やっぱり葉造さんは、お前を高校へ行かせたいっち。うちの親父が『本人の希望を優先してやれ』ち言うても、てんで

耳を貸さん。うちの親父に『あんな頑固者はおらん』ち言わせるんやけん相当なもんで。それにしても、なんで葉造さんはそこまで進学にこだわるかの」

「なんでち思う？」俊介は訊ねた。

「一般的にいえば、父親は息子が自分の仕事を継ぐことを歓ぶはずや」

「そうっちゃ。お前んちもそうか」

「うちは家業やけん尚更な」

「でもお前は、大学まで行けち言われちょんのやろ」

「ああ。親父はキョーリンがいまだに銀行から融資を受けられんのは、自分に学歴がないせいもあるっち思うちょん」

「そうなん？」

「どうやろう。それもあるかもしれんの」

俊介は春霞にもやる別府湾を見おろして、ため息をついた。将来社長になる者には学歴が必要かもしれないが、調査員になりたい者には無用の長物ではなかろうか。あるいは葉造も自分の無学にコンプレックスを感じており、息子に仇をとらせたいのか。

教会のドアが開き、授業を受けていた人たちがぱらぱらと出てきた。高校生の姿が目立つが、市民講座なので大人や子どもも混じっている。

最後に湯太郎が、デーケン神父と話しながら出てきた。

「おーい、湯太郎」

二人は立ち上がって手を振った。

「あれ、来ちょったん？　神父、ご紹介します。僕の同級生です」

絵に描いたように謹厳な風貌をした神父は、二人に微笑みかけると、「See　Yu-taro」と湯太郎の肩を叩いて、中へ戻っていった。

「いまのはSee youとYutaroを引っ掛けたんよ」と湯太郎が言った。

「それくらい解説されんでもわかるわ。なあ、一平」

「いや、全然わからんかった」
「ありやりゃ」
三人は声をあげて笑った。
芝生のうえに、車座になって座る。
「さっきお前の家を訪ねたけど、住んでる気配はなかったぞ。いまはどこに住んじょるん？」と一平が訊ねた。
「コバケン(注)の家。春休みに入るまで置いてもらうことになったんよ。休みに入ったら大阪のおじさんのところへ行って、今後の相談をしてくる」
「どげな相談な？」
「住む場所のこと、お金のこと、将来のこと。そういうこと全部よ」
「やっぱりおじさんの事務所で働くことになるん？」と俊介が訊ねた。
「たぶんな。じつは神父さんが僕を引き取って跡を継がせてくれるち言うたんやけど、丁重にお断りした。『そんなんじゃ将来、メシが食えへんぞ』ちおじさんが言うけん」
湯太郎の声には落ち着きがあった。母の看取りを経て、いくらか大人びたようだ。
「やけん、ひょっとしたら新学期から大阪に転校することになるかもしれんよ」
「え!?」
二人は同時に声をあげた。
「お前はそれでいいんか？」と一平が訊ねる。
「よかないけど、仕方ないやんか」
「よかないよな。葉山紀見子もいることやし」
一平が湯太郎の片思いの相手の名前をだすと、湯太郎は「関係ないやろ！」と首筋まで真っ赤に染めて怒った。
「すまんすまん」
一平が小さくなって謝る姿に、俊介は微笑を誘われた。いつものパターンだが、幼年時代から続くこの光景が、あと数日で終止符を打たれるかもしれないのだ。

湯太郎が、いなくなる。
遠くへ行き、会えなくなる。
俊介の心は真空のようになってしまった。
「なあ、湯太郎」
俊介は真空心地のまま呼びかけた。
「ひとつ訊きたいことがあるんやけど、いいか」
「いいとも」
「変な質問で」
「ノー・プロブレム」
「やったら訊くけど、お前はいまどれほど不安なん？」
「えっ？」
「一人になるっちゅうんは、どういうことか、お前の身になって想像してみようとしたんやけど、うまくいかんのよ。俺や一平には、養ってくれる親父がいる。毎日メシをつくってくれるお袋がいる。やけどお前は一人や。それはどれくらい不安なん？寂しいか？　哀しいか？　お前の本当の気持ちはどうなん？」

②

俊介が訊ねると、湯太郎はみるみる表情を喪っていった。利発な湯太郎が言葉を見失うことじたい、珍しいことだった。やがて湯太郎の目から、ツーっと涙が流れた。透明なしずくは静かに、しかし止め処なく頬をつたい、芝生のうえに滴り落ちていった。
うおっ、と一平が太い涙をあふれさせた。
「泣け、湯太郎！　思う存分、泣け！」
湯太郎は膝のあいだに顔をうずめて叫んだ。
「なんで母さんは死んでしまったんよ！」
続けて叫ぶ。

「なんで母さんやないといけんかったん？」
俊介も熱いものが頬を伝った。一緒に泣くことしかできない自分の無力が恨めしかった。涙が引くと三人は芝生に寝そべり、空を見上げた。塩気のぬけた体は虚脱感につつまれ、しばらく立ち上がれそうになかった。
海風によって靄が払われると、ぽっかり青空がのぞいた。青かった。吸い込まれてしまいそうなほどの青だ。俺はこの空の青さを、きっと生涯忘れないだろうと俊介は思った。
空に向かって、一平がつぶやくように言った。
「俺に考えがある。ちっとう時間をくれんか」

その晩、葉造から「話があるけん座れ」と言われた。きた、と俊介は思った。進学を命ぜられたら、一度は抗弁するつもりだった。父の前に膝を折ると、花奈が二人にお茶を淹れて台所に下がった。
「一つずつ、譲り合おう」
と葉造が言った。
「お前は高校に行くことで、俺に一つ譲れ。俺はお前が高校卒業後、まだキョーリンに入りたいち言うんなら、永伍に掛け合って入れちゃる。これで貸し借りなしっちうことで、どうな」
「わかりました」
俊介は頭で考えるよりも先に、口が返事をしていた。葉造が頭ごなしに進学を押しつけてこなかったことが嬉しかった。それであっさり折れてしまった自分は、どうしても就職したい訳ではなかったのだと気づいた。
「あしたはトンカツを揚げましょうね」
やりとりを見守っていた花奈が、嬉しそうに言った。

終業式のあと、三人は裏山へ向かった。
上履きや教科書でパンパンに膨らんだカバンを根本に放り投げ、クスノキによじ登る。昼前から気温が上がり、この調子なら明日にでも桜のつぼみが開きそうだ。

「こういう日を、春風駘蕩ち言うんじゃろうな」
樹上から湯太郎が周囲を睥睨して言った。
俊介は胸いっぱいに空気を吸い込んだ。たしかに春の甘い味がする。
「春風駘蕩か。さすがにオール五の人間は言うことが違うな」と一平が言った。
湯太郎の通信簿は主要五科目がオール五で、それ以外はだいたい四。俊介は体育が五のときがあったりなかったりで、あとはばらばら。
一平は国語がつねに五だった。というのも一平は読書家で、とくに吉川英治や山岡荘八の歴史小説を好んで読む。時おり、「武蔵はやはり剣の達人やったち思うな」とか、「本多忠勝ちうのはなかなかの人物や。家康が天下を獲れたのは家臣団のお陰よ」などと言う。
一平はちぎった葉っぱを銜え、「集まってもらったんはほかでもない」と言った。
「二十六年前、このクスノキの上で誓いを結んだ三人の十五歳の男がおった。うちの親父と、俊介の親父と、純一さんちいう人や。十五ちいえば昔の元服。大人になってそれぞれの道を歩み始める頃よ。そこで親父たちは言い交わした。『道は違えど、永遠の友であることに変わりはない。誓いを結ぼう』とな。約束は三つあった。一つ、友のピンチは助けること。助けられる側も遠慮したらいけん。二つ、友の頼みは断らんこと。三つ、友に隠し事をせんこと。どげえな、俊介は聞いたことあるか？」
俊介はかぶりを振った。初めて聞く話だ。
「もう一人の純一さんち人は、死んだんやっけ？」と湯太郎が訊ねた。
「ああ。満州で戦争の犠牲になったらしい。お前みたいに頭の冴えた人やったそうや。うちの親父が兵隊に取られるとき、三人は『死んだらあのクスノキでまた逢おう』と誓い合ったそうやが、結局その純一さんだけが亡くなった。それはともかく、しょせん一人の人間に出来ることなんかタカが知れちょん。扶け合わねば生きていけん。どげえな。誓いを結ぶか、結ばんのか」
「もちろん、結ぼう」と俊介は言った。
「僕もオーケーよ」と湯太郎が続く。
「それでは天沢一平は、この三箇条を誓う」
「合志俊介も誓う」

「Yutaro Niwai, too」
湯太郎の巻き舌が可笑しくて、
「なんな、それ」
と俊介は噴き出した。二人の高らかな笑い声があとに続く。
少年たちは、世間の大人が欲しがるものは何ひとつ持っていなかった。けれども若葉は香り、春風は頬をくすぐって、笑い合える友がいた。それだけで充分だった。
「それでは早速、誓いを発動させてもらうぞ」
と一平が言った。「湯太郎。お前は俺と一緒に小倉の志學館へ進学しよう。学資はうちの親父がもつち言いよん」
「えっ!?」
これには俊介も驚いた。志學館といえば全寮制の男子校で、文武両道の私学として名高い。
「親父はお前が社会に出るまで、一切合切の面倒をみるっち約束した。東大でも通訳でも、好きなものを目指せ」
「でも……」
「こら、遠慮は禁物ち約束したはずで。それにうちの親父はむかしから家に書生を置くのが夢での。いつか、そういう分限になりたいち言いよった。やけん葬式でお前を見て『よし、俺が面倒をみよう』ちなったわけよ。志學館の寮に入るまでの一年は、うちの離③れに住め。ちょうど住み込みの社員がひとり出て行ったばっかりや。共同生活になるけど、構わんやろ」
俊介は一平の策士ぶりに舌を巻いた。絵を描き、根回しをして、機が熟すのを待っていたのだ。
「でも、そんなん悪いわ」と湯太郎が言った。
「気にするな。いつか借りを返してもらう日もくる。決まりでいいんな?」
「やけど……」
「なんなん。志學館が気に食わんの?」
「そんなことない。単に申し訳ないだけよ」
「何度も言わせるな。遠慮するんは誓いを立てた相手に失礼で。俺は将来自分が困ったとき、お前らに全財産を質に入れてでも、助けてもらうつもりよ。男同士の約束とは、そげえもんじゃ」

「そっか……。じゃあ、うん。ありがたく乗らせてもらうわ。やっぱり別府を離れるのは嫌やし」
よしっ、と一平が拳を叩いた。「ところで、それでも今日お前は大阪に発つん？」
湯太郎は四時の汽船で大阪に向かう予定だった。
「うん。こうなったらおじさんに現状を説明せんといけんし、せっかく大阪を見るチャンスやもん」
「やったらあとで見送りに行こう」
と一平が言った。俊介は頷いた。
「わかっちょんち思うけど、今日の誓いのことは他言無用。一生、三人の胸の中にしまっちょこうな」

俊介はうちに戻ると、花奈に握り飯をつくってもらい、それを持って家を出た。別府港は目と鼻の先である。
俊介は桟橋あたりに腰をおろした。砂浜では気の早い人たちが水着姿になって、貸天幕の下で砂湯を楽しんでいる。砂湯の効能はつとに有名で、とくに神経症に効くという。
湾内に目を移すと、湯治船が停泊していた。その名のとおり湯治が目当てで、愛媛あたりの漁村から瀬戸内海を漕ぎ渡ってきた船だ。湯に浸かる時と買い物の時しか陸には上がらない。船内で寝起きしながら、長ければ数ヶ月も湾内に逗留する。
――船の暮らしは、住所のない世界。それじゃ地図屋は商売上がったりやな。
そんなことを思いながら二人を待っていると、
「おい、一人でなにニヤニヤしよん。気持ち悪いぞ」と一平の声がした。
「お、来たか」
「あれが湯太郎の乗る船か」
一平が船着き場の汽船をさした。全長七十メートル、二〇〇〇トン級。この船が明朝には、湯太郎を大阪に届けてくれる。
やがて湯太郎も到着した。どちらが背負われているのかわからないほど大きなリュックを背負って。
「でか過ぎんか、それ」と俊介は言った。
「どうせ帰りはお土産を持たされるけん、これで行けっちコバケンが」
「なるほどな。ほれ、餞別を持ってきたぞ」

一平が尻ポケットからクラスの集合写真を取り出した。「愛しの人を眺めちょれば、旅も寂しくないやろ」一平と葉山紀見子は同じクラスである。

「要るかっ！」

湯太郎は写真を突っ返した。

「遠慮禁物っちいうルールをまた忘れたか」

「断固ことわる」

「なんか。せっかく持ってきちゃったに」

一平はしぶしぶ写真を収めた。どこまでが本気で、どこからが冗談なのかよくわからない。

「あっ、乗船がはじまったで。ほれ、こっちは本物の餞別や。親父から預かってきた」

一平が湯太郎のポケットに封筒をぐいとねじ込んだ。

「こっちは握り飯や」

俊介も湯太郎のリュックに握り飯を入れ、ポンと背中を押す。「じゃ、行ってこい」

「ありがとう」

「ほんとに葉山の写真持って行かんでいいんか」

「しつこい！」

湯太郎が船に乗りこんだ。汽笛が鳴り、ゆっくりと船が動き出す。

二人は、湾をぬけた船が小さな点になるまで、目を細めて見送った。

④一年後、三人は卒業式のあとクスノキに集合した。

「まず、俺からいくで」

一平は手にしたナイフで、父親たちの文字の横に「一」の字を刻みこんだ。次に俊介が「俊」の字を、最後に湯太郎が「湯」の字を。

永葉純一俊湯

クスノキに刻まれた六文字を見ていると、なにかしら愉快（ゆかい）な気持ちになってきた。「ふふふ、できたの」「ああ、できた」「浜中（はまちゅう）卒業や」「うん、卒業や」「万歳（ばんざい）でもするか」「ああ、しよう」「浜中卒業、万歳！」

「バンザーイ！」

「バンザーイ！」

三人が放り投げた学帽（がくぼう）は風に乗り、思ったよりも長く宙を舞（ま）った。

（平岡陽明『道をたずねる』）

（注）コバケン……湯太郎の担任

問一　――線部①「じつは昨晩、葉造さんとうちの親父が激しく口論してな」とありますが、「葉造」と「うちの親父（永伍）」の主張を具体的に説明しなさい。

問二　――線部②「湯太郎はみるみる表情を喪っていった」とありますが、湯太郎の変化を、そのきっかけもふくめて説明しなさい。

問三　――線部③「一平の策士ぶり」とはどのようなことですか、具体的に説明しなさい。

問四　――線部④「一年後、三人は卒業式のあとクスノキに集合した」とありますが、三人は何のために、この日に「クスノキに集合した」のですか、説明しなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

新聞は実は、世の中のことを知ったり、メディアリテラシー(注1)を身につけたりする上で①「初心者向け」のメディアだと私たちは考えています。

「新聞＝古い／大人向け」「ネット＝新しい／若者向け」という先入観でつい見落としがちになってしまうのですが、世の中で起きていることについて、自分なりに考えることができるようになるには、世の中の動きに関する基本的な知識が必要です。

いま何が起き、いま世の中は何に関心があり、将来、どんな方向に向かおうとしているのか。そうしたことを考えるベースになる情報をニュースのプロが無駄なくざっくり選んでくれるのが新聞なのです。この章の最初でも話しましたが、世の中の動きを効率的に集められるメディア。それが紙の新聞です。

対して、ウェブはニュース上級者向けのメディアです。日々、リアルタイムに更新される膨大なニュースの中から、自分にとって重要な情報をピックアップするのは大変なことですし、それだけではなく、その情報が信用できるかどうかのリテラシーも求められます。最近のウェブメディアでは、ユーザーの好みを分析して、そのユーザーが好きそうな記事を目立つ場所に置いていることが多いです。これでは知識に偏りが生まれる恐れがあります。

学校の教科書とは違って、ネット上には膨大な情報と多様な意見があふれかえっています。誰がどんな考えで、どんな情報を流しているのか。スマホの画面に映るその先を想像できる目がなければ、効率的に情報を集めるのは難しいばかりか、デマにだまされてしまう、なんてことも起きるかもしれません。

一つ、たとえ話をしましょう。

レストランでワインを注文しようとしたときに、分厚いワインリストを手渡され、「どれにしますか？」って言われたら、みなさんはどう感じますか？

ワインに対する知識やこだわりがない人はきっと困惑しちゃいますよね。「いや、細かい銘柄とかわからんし……」という声もあるでしょうし、そもそも、リストに載っている値段が適正なものかどうかも分かりません。

逆にワインに詳しい人であれば、分厚いワインリストは苦にならないし、むしろ情報量が多い方が楽しめるかもしれません。リストの中から自分の好みや料理に合うワインを探したり、場合によっては、見たことがない未知のワインに挑戦したりして楽しむこともあるでしょう。

つまり、新聞は新聞社がニュースのソムリエ(注2)になって、読者のみなさんに世の中で起きている出来事を、責任をもって伝える媒体なのです。特にＫＯＤＯＭＯ新聞や中高生新聞といった、世代ごとに作られている新聞は、それぞれの世代に必要な情報を厳選して紹介することを心がけています。

長くＫＯＤＯＭＯ新聞、中高生新聞の編集に携わってきた記者として、最も理想とする目標は、読者のみなさんが、新聞を通じて、ウェブを含め、様々なメディアを使いこなせる基礎的なメディアリテラシーを培い、将来、自己実現を果たしてほしいということです。

少し話がそれますが、「自己実現」と「メディアリテラシー」という言葉が出てきたので、②これからの社会でメディアリテラシーが求められる理由について、記者の立場から考えていこうと思います。

いま、日本の教育は大きな転換点を迎えています。ざっくり言えば、従来のような「正解を素早く、正確に導き出す力」よりも、「正解のない問題に主体的に取り組める力」を伸ばす教育に変えていこうという流れです。その中でも具体的に注目されているのが、「思考力」「判断力」「表現力」といった力ですね。

でも、なぜ国はそのような力を伸ばそうとしているのか。

いろいろ理由はありますが、私たちが出前授業で中高生や先生方に問いかけているのは、「あなたが今、描いている将来の夢は、20年後も今と同じように存在すると思うか」ということです。

人工知能（ＡＩ）を含む科学技術の進歩で、私たちの暮らしは急激に進化しています。この傾向は今後も加速度的に進む見通しで、野村総合研究所とイギリス・オックスフォード大学の共同研究では、10～20年後には、日本の労働人口の49％が就いている職業がＡＩやロボットに代替されうるとの試算も出ています。

つまり、私たちが今、見ている社会は子どもたちが大人になる頃には大きく姿を変えている可能性がある。ＡＩによって代替される職業もあれば、技術の進歩で新たに生まれる職もあるでしょう。さらに、２０２０年には新型コロナウイルス問題が発生。

私たちの暮らしや働き方は大きく変わりました。10代にとって、いわゆる「昭和の人生すごろく」のように、良い大学に行って、良い企業に就職して、結婚して、子どもを作って、定年まで働く――みたいな未来予想図を描くことはますます難しくなっています。

この急激な変化の波にどう対応すべきなのか。答えはすごくシンプルです。自分の責任で考え、自分が正しいと思う答えを導き出すしかない。１００人いれば１００通りの答えや考え方が生まれるでしょう。

国が「正解の決まった問題を解く力」から「正解のない問題に取り組む力」を伸ばそうと考えているのは、まさにそうした変化に対応できる人間にならないと生き残れない社会が、現実問題としてすぐそこに来ているからにほかなりません。しかも、そもそも「正解の決まった問題を解く力」はＡＩの最も得意とするところ、ですよね。

正解のない問題に取り組む＝不確定な未来を見通すためには、答えを導き出すための材料（引き出し）が必要です。正しい情報や自分に必要な情報を適切に取捨選択できるメディアリテラシーはその材料探しの基盤になるもの。子どもの頃から習慣的に鍛えておくべき「生きる力」の一つだと思います。

（新庄秀規・藤山純久『伝える技術はこうみがけ！』）

（注１）リテラシー……ある分野に関する知識や能力

（注２）ソムリエ……客の相談を受けてワインを選定・提供する専門職

問一　――線部①『初心者向け』のメディアだと私たちは考えています」とありますが、新聞のどのような点が「初心者向け」なのですか、説明しなさい。

問二　――線部②「これからの社会でメディアリテラシーが求められる理由」とありますが、なぜ「これからの社会でメディアリテラシーが求められる」のですか、百字以内で説明しなさい。

三

各文の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

(1) 祖母の家にキシュクする。

(2) ハクラン会が開かれる。

(3) キンセイのとれた体。

(4) ゴシン術を学ぶ。

(5) ドウコウイキョクの作品。

鷗友学園女子中学校

二〇二二年度

第一回入学試験 解答用紙 【国語】

受験番号

氏名

得点

一

問一

問二

問三

問四

二

問一

問二

三

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

このらんには何も書かないこと